

---

Alc

あさひな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A I C

### 【コード】

N 9 4 0 6 Z

### 【作者名】

あさひな

### 【あらすじ】

『A I C』 VR型MMORPGとして発表され、今世間を賑わしている。

竜也と悠斗もA I Cプレイヤーの一人だ

今日も変わらずA I Cにダイブした竜也だったが、目覚めた其処は

…

物語りの始まりは得てして理不尽(前書き)

急に書きたくなって書きました

後悔はしています

反省はしていません

誤字脱字、日本語おかしい所ありますが  
よろしく願いいたします

## 物語りの始まりは得てして理不尽

「竜也、今日は19時にトラボルタ中央広場な」

つつがなく一日の授業が終わり、家へ帰る準備をしていた俺に、そう話し掛けたのは悠斗だった。

「ああ、りょーつかい。今日は何するんだ？」

俺たちが話しているのは、オンラインゲーム『A1c』についてだ。

『A1c』 VR型MMORPGとして発表され、今世間を賑わしている。

基本的な流れは依頼を受けて達成し報酬を得る。

従来のMMORPGと大きく違うのはVR型、つまり、仮想現実としてA1cの世界を楽しめると言うことだ。

このVR技術を開発したGlory Computer社（通称口リコン）は、軍事転用が可能だとか若者の現実離れの原因とかで一部の人から叩かれてるらしい。

まあどうでもいいんだけど。

「実はな、面白い噂を耳にしたんだ」

悠斗はいつも色んな情報を何処からともなく仕入れてくる。

この前なんかは、テストの問題を入手し、クラスメイトに売って稼いでいた。

俺も助けられました。

「どんな？」

「A1cの何処かに存在しないはずのNPCがいるんだってさ。そして、そのNPCに会ってはいけならしい。けど、その理由は解らないんだとよ」

あゝ、つまりあれか

「今日はそいつを探しに行くのか」

「正解」、と悠斗は悪戯つ子のように笑った。  
「や、そんな嬉しそうに…。大丈夫なのか？」  
「うん、たぶんな」  
「マジかよなら俺行かな」「んじゃ、さっき言った通りに待ち合わせようぜ。遅刻すんなよ？」  
そう言うと我が親友はさつさと帰ってしまった。  
…まあ仕方ない、あいつは一度決めたら止まらないからな。  
諦めて帰りますか。

我が家に帰った俺を妹が迎えてくれた。

俺は妹と二人で暮らしている。

両親が居ないのは幼い頃に死んだ、とかではなく、結婚二十周年記念に欧州へ旅行しているのだ。

当初は家族四人で行くはずだったが残ることにした。

両親が仲睦まじいのは子供として嬉しいが、旅先でのいちやいちゃを見せつけられたら敵わないからな。

買ったばかりのA1cがしたかつたつてもある。

「お帰りお兄ちゃん、お風呂にする？ご飯にする？それともわ・た・し？」

「それじゃあ七海ちゃんにしようかな」

「うっわキモいからやめてよね」

こんな風に飴をちらつかせて突き落とすのが七海ちゃんです。

これは我が家ではよくあることで、お互い冗談だとわかっている、はず。

最近兄を見る目に嫌悪が含まれている気がする。  
気がするだけだと信じている。

「はいはい、飯と風呂終わったらA1cするから」

「また？毎日してるよね？」

「面白いからな！」

七海ちゃんはゲームをしない。

曰く、ゲームは時間と金の無駄、だそうだ。

嫌ってる訳では無さそうだが、買った日から毎日続けているので良  
くは思っていないだろう。

「…まあいいけど。12時ぐらいにはやめなよ？身体に悪いし」

「ん、りょーつかい。せつかく七海ちゃんが心配してくれているん  
だしね」

「うっさい、バカ」

照れ隠しに言っているのが丸解りでなんとも可愛らしい。

顔は全くの無表情だったが。

食事と入浴を終えた俺はダイブ用ゲームハード『コクーン』の中に  
いる。

コクーンはその姿形が繭に似ていることからそう呼ばれている。

中にはリクライニングシート（気持ち良さは従来の物とは大違いだ  
が）と起動スイッチ、ディスクカード差し込み口だけとシンプルな  
設計だ。

俺はA1cを差し込み深い空に落ちていった。

目覚めると其処は、其処は暗闇だった。

えっ？えっ？えっ？なにこれ何が起きた！？

俺はホームエリアをトラボルタ街に設定していたはず。

なのに目の前に広がるのは、ただただ黒一色のみ。

「何処だよ此処！」辺りを見渡すが何かの目星となるものは無かった。

というか見えなかった。

そうだ、とりあえずエリアを確認しよう。

ステータスを開けば解るはずだ。

プレイヤー : 竜也

職業 : 盗賊

熟練度 : 28

固有スキル : 罾設置 罾解除

メル : 1200

武器 : スティールナイフ

防具 : なし

エリア : ????

「おいおい……マジかよ『????』ってありかよ、此処が何処かも解らないのかよ。

なら次は悠斗に連絡を取ろう。

フレンド登録をしているので繋がるはずだし、あいつのことだ

この事態についても何か知っているかもしれない

俺はウィンドウからフレンドリストを開き悠斗を選んだ

「頼む…繋がれ繋がれ！」

しかし、ウィンドウには空しくno playerと映るだけだった。

「くそっ！！なんで繋がらないんだよ！」

後、俺に残された唯一の手段はログアウトだけだったが。  
見当たらない、無い。

ウィンドウの右端、そこに、本来ならばあるはずのログアウトの文字が、無かった。

「いったいななんだよおおおおおおお!!!」  
俺の叫びは反響し拡散するばかりだった。

—  
—  
—  
ん？ちよつと待てよ。

反響したってことは壁、もしくは天井があるってことだ。  
なら此処は何も無い訳じゃないのか。

そうと解れば出口を求めてどんどん突き進むだけだった。

よくよく考えれば出口がある保証も無かったが、落ち込んだ気分を持ち上げるには充分だった。

しばらく歩き続けると俺の腹に何かが当たった。

恐る恐るそれに触れてみると、ドアノブのようだった。

まさか此処は部屋だったのか？それにしても大きすぎる気もするが。  
だが、せっかく見つけた蜘蛛の糸。

此処から出られるかもしれないと思うと、そんな些細な疑問はすぐに消え去った。

そして俺は、一縷の望みを託してドアノブを回した。

物語りの始まりは得てして理不尽（後書き）

と、まあ一区切り

次の展開も皆さんならお見通しなのでしょうが  
飽きられないよう頑張ります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9406z/>

---

Alc

2011年12月29日13時48分発行